

## 西ヶ原の牡丹屋敷をめぐって

学芸員 植島 暁子

江戸300年にわたって庶民の暮らしに関わり深い事柄を取り上げている『武江年表』\*1は、寛政年間のできごとに西ヶ原の牡丹屋敷を取り上げている。

「いつの頃より始まりしか、西が原に湯島の牡丹屋太右衛門の別荘ありて、花壇に紅白の牡丹英をあらさふ。盛りの頃貴賤群集せり。文化の始めに絶えたり。」巻之七

『武江年表』正編8巻は嘉永3年(1850)に刊行された。撰者は神田雉子町名主の斉藤月岑(幸成)(1804-1878)で、寛政年間の出来事は直接の見聞ではなく、先行する文献を参考に編纂されている。この記事の信頼性が高いのは、寛政の祖父の代から3代にわたって続けられた『江戸名所図会』出版のための準備と実地調査の裏付けがあるからである。\*2 月岑は祖父・父の残した草稿を改訂して天保5年(1834)と7年(1836)にわけて『江戸名所図会』7巻を刊行した。その中ではこの牡丹屋敷についてはふれていないが、西ヶ原の地域は平塚神社や無量寺を挿絵入りで取り上げ、詳しく紹介している。

従来、牡丹屋敷については不明な点が多く、『北区史』\*3でも十分解明はされていなかった。本論は西ヶ原の牡丹屋敷をめぐって、いつ頃成立したか、具体的に西ヶ原のどこにあったか、なんの目的で作られたか、どんな様子であったかなど、その姿をできるだけ明らかにしたい。

さてその前に牡丹栽培の歴史を簡単に述べたい。牡丹の花は中国原産で唐の時代に非常に愛好された。日本には奈良時代に入ってきたようだが、はじめは薬用として栽培されたいい。平安時代になると貴族や寺院の庭を中心に植えられ、花の美しさから鑑賞にも供されるようになった。「花の王」と称され、富や権威の象徴となり、安土桃山時代には絵画、建築彫刻、工芸などの主要なモチーフとして多く用いられている。江戸初期には品種改良が進み、元禄時代にかけて盛んに栽培されるようになり、多くの専門書が出版された。\*4 染井の植木屋伊兵衛が元禄8年(1695)に著した「花壇地錦抄」\*5は日本最初の総合園芸書であるが、巻頭には牡丹を取りあげ、494品種も列挙している。しかし江戸の中期以降は流行の低落と品種の減少があり、江戸後期には本草図譜にもあまり取り上げられなくなった。\*6 曲亭馬琴(1767-1848)は随筆『玄同放言』\*7で牡丹の人気を「宝永年間(1704~1711)の比に至りて、この花を弄ぶこと、異朝唐宋の時に譲らず……宝永を真盛にして、この花漸々に衰たり」と記している。この宝永のピークを少し越えた頃に牡丹屋敷は歴史に登場する。

松平冠山(1767-1833)は鳥取藩若桜二万石の五代藩主で、好学の大名として知られている。彼の著作の「三浪一覽」\*8は成立年代が特定されていないが、江戸城下の一日の間に巡歴できる範囲の地誌を書き記したもので13日分が記されている。\*9 牡丹屋敷については2カ所で言及されている。\*10



「牡丹屋敷、西ヶ原ニ在。中里より王子の往還へ出る道なり。御用の牡丹を作。花の富貴にならへてや住家もいやしからぬ」

「牡丹屋敷、御門外船河原町に在。いつの比か御用の牡丹を作る牡丹屋九右衛門と云もの拝領屋敷の跡有、今町屋となれり。此牡丹屋後に西ヶ原にうつりたるとなん」

つまり牡丹屋敷が元は牛込門外の船河原町にあり、牡丹屋の名前は九右衛門と云って御用の牡丹を作る拝領屋敷であったが、後に西ヶ原に移ったこと、西ヶ原の牡丹屋敷は中里から王子へ往還の道に在って、立派な屋敷であったというのである。

「牛込牡丹屋敷」は、明治までは町の名として残っていたが、明治2年に牛込玉咲町と改称(玉咲は牡丹の代表種)され、同5年に神楽坂1丁目となった。<sup>\*11</sup>『御府内備考』<sup>\*12</sup>によればここは元武家地であったが、後に紀州出身の岡本彦右衛門という者が徳川吉宗の御供で江戸へ出て、武家にお取り立てのところをご免願って町屋を望んだので、この屋敷地を拝領した。彦右衛門は「御伝法熱湯散」という薬をひろめ、幕府から大鷲1羽を預かり、屋敷内で牡丹の花を作り献上したことから牡丹屋敷と唱えるようになり、屋号を牡丹屋彦右衛門と改めた。しかし宝暦年中に御咎めを受けて家財を没収され、土地は上り屋敷となり、宝暦12年(1762)に三つ割屋敷となって大奥女中ら3人の拝領町屋となった。『御府内沿革図書』<sup>\*13</sup>では拝領ではなく拝借となっており、武家地からいったん火除地となっていた土地の一部が享保14年(1729)彦右衛門の拝借地となったと記されている。牛込牡丹屋敷町の広さは「町方書上」<sup>\*14</sup>によれば総坪数552坪であった。

彦右衛門の売り出した「熱湯散」は熱さましや血のみちの薬として明治初期まで売られていたようで、主成分は人參らしい。『御触書宝暦集成』に延享4年(1747)に人參熱湯散(婦人一切血之道之薬)と妙應散(疾瘡毒之薬)が牡丹屋彦右衛門方にて免許を得て売り広められたと記されている。<sup>\*15</sup> ちなみに瘡毒は当時から流行していた梅毒のことである。一般に人參は万能的な薬効があると信じられ、宝暦頃には並人參一兩目(15g)がほぼ金一兩の価であったといわれている。<sup>\*16</sup> 人參栽培はようやく国内で成功し、元文3年(1738)に人參の種子が幕府御用の薬種商から売出されたばかりであった。<sup>\*17</sup> 『御府内沿革図書』の享保一元文年間の地図には「牡丹屋彦右エ門拝借地」を囲んで「同人人參植付場拝借地」が見てとれる。牛込牡丹屋は植木栽培ではなく人參栽培を主としていたと考えられる。牡丹はその根が生薬の牡丹皮となり、漢方では重要な処方中に配合され頻用されている。(桂枝茯苓丸、大黃牡丹皮湯など)<sup>\*18</sup> 花を献上したと伝えられるが、御用の牡丹の栽培目的は鑑賞用の花より、薬用であったのではないだろうか。当時の幕府の植物への関心は主として食料や薬草に利用できるものに向けられており、享保6年(1721)には小石川の薬園が設立されている。<sup>\*19</sup> 屋敷拝領から約40年後のお咎めについては詳らかではないが、牡丹屋敷も人參畑も取り潰され、この後で御用の牡丹栽培は西ヶ原に移されたらしい。

『北区史』では西ヶ原の牡丹屋敷についての資料は明和8年(1771)が初見としている。<sup>\*20</sup> その後の安永・天明の賑わいを伝える文献を収録し紹介しているが、文化以降のものは挙げられていない。筆者が年代順に整理してみると次のようになる。

- (1) 明和8年(1771)に発行された札所めぐりの乗は札所三十三番観世音と沿道の道順を順記すが、中里圓勝寺と西ヶ原無量寺の間に「此間に牡丹屋太右衛門牡丹畑あり。江戸随一にして見物多し」と記されている。<sup>\*21</sup>



- (2) 安永2年(1773)の地誌『江戸図説』は「西ヶ原牡丹 湯嶋牡丹屋太右衛門別荘なり、売物ニあらず 案内を立入 花壇紅白花ふさをあらそふ、盛りの比見物多し」と記す。<sup>\*22</sup>
- (3) 安永5年(1776)の『四時遊観録』には「西ヶ原牡丹屋太左衛門園中花壇、紅白の花房を争い、誠に花の王なるを、尤売物ならねばみだりに入れず、勝手より案内を乞て見物すべし」とある。<sup>\*23</sup>
- (4) 安永から寛政(1774~1790)にかけて、柳沢吉保の孫で元大和郡山藩主の柳沢信鴻は駒込の下屋敷(現在の六義園)に隠居しており、花時に度々西ヶ原の牡丹花屋を訪れて、その様子を日記に記している。  
『宴遊日記』<sup>\*24</sup> 安永3年4月、5年3月、7年4月、9年4月、天明4年4月  
(安永3年は11月にも立ち寄っている)  
『松鶴日記』<sup>\*25</sup> 天明7年3月、9年4月、寛政2年3月
- (5) 寛政年間(1789~1800)記事として『武江年表』「西が原に湯島の牡丹屋太右衛門の別荘あり」
- (6) 寛政8年(1796)の花暦である「花信録」には西ヶ原牡丹屋敷に単弁桜があり、と記されている。<sup>\*26</sup>
- (7) 享和3年(1803)頃刊行の『増補江戸年中行事』<sup>\*27</sup>には四月の項に「西か原牡丹屋立夏より三日め頃さかりなり」とある。
- (8) 文化の始め(1804~)『武江年表』は「絶えた」と記す。
- (9) 天保9年(1838)刊行の『東都歳時記』は当時の江戸の牡丹の名所をいくつかあげているが、「西ヶ原ぼたん屋敷は今なし」と記す。

以上の文献から次のようなことがわかる。中里圓勝寺から西ヶ原無量寺に向かう間の道に牡丹屋太右衛門の「牡丹畑」があり、明和8年(1771)にはすでに開設されていて、江戸一番の牡丹の名所として知られていた。ここは湯嶋牡丹屋太右衛門の別荘で、花壇に多くの種類の牡丹を植えていたが、御用のために作るのではなく、花を見物するには案内が必要であった。牡丹は百余種ほど、花の盛りは4月立夏より3日目頃とされ、盛りの頃には見物人が多かった。御用の関係からか、元藩主の柳沢信鴻や松平冠山など身分の高い武家が訪れている。中には大名や奥方がお忍びで来ている場合もあり、座敷が貸切りになることもあった。屋敷は牡丹の花にふさわしい立派なものであったらしい。屋敷の主人は安永7年当時で70歳くらいの隠居であった。寛政から享和までは賑わっていたようだが、文化の始めに絶えた、ということになる。

染井や西ヶ原には多くの植木屋がいたはずなのに、湯島の町人が牡丹御用の指定となるのは不思議である。湯嶋の牡丹屋太右衛門については西ヶ原の別荘以外に言及されている資料は見つからなかった。『北区史』は牡丹屋という屋号を持つ植木屋としている。<sup>\*28</sup>『御府内備考』によれば湯嶋一丁目、三丁目には植木溜があり、寛文の江戸図には天神門前町の西に植木町の名もあったという。元禄10年(1697)の『国花万葉記』<sup>\*29</sup>は植木屋では染井駒込と湯嶋を挙げている。柳沢信鴻も「牡丹花や」と呼んでいるところから、確かに御用庭師や植



木屋のイメージが強い。しかし鉢や苗木を売り物にするわけではなく、牛込牡丹屋敷の御用を引き継いだとすれば、実態は植木屋とは異なるだろう。今のところは牡丹屋と薬草栽培や薬の販売と直接結びつける証拠はない。しかし『御府内備考』は寛政10年(1798)まで湯嶋聖堂脇で和人参が作られていたことも記しており、また貞享4年(1687)の『江戸鹿子』\*30の六巻「諸職名匠諸商人」の薬品の部には湯嶋天神前の膏薬屋2軒、明神下の疲癆瘡薬1軒、神田天神の美清香1軒、本郷の目薬1軒などが挙げられており、元禄以前から本郷・湯嶋地域は有名な薬屋がいたことで知られている。

一方、牡丹の花の御用の例は少し時代は下るが文献からうかがえる。元任職で茶名や俳名を持つ風流人の十方庵敬順(1762-1832)は『遊歴雑記』三編\*31に文化末頃、上尾久村の医師佐治玄琳の庭を訪れたことを記している。玄琳の庭はひと株で百余輪の花をつける樹高7尺、枝張9尺の大木の牡丹で有名であったが、その珍しい木は御物に指定され、度々御成りもあり、毎年役人が枝ぶりや花の数を吟味に来ることなどを庭の案内人が語っている。広い庭には幅1間・長さ5間の花壇2筋を作り、牡丹を40種ほど植えていて、家は広く風流な造りで茶室もあったと伝える。『武江年表』も文化年間記事でこの庭を取り上げているが、御用についてはふれていない。\*32

牡丹屋の正体と御用の向きはこれ以上はつきりしたことはわからない。しかし、『文京区史』によれば、江戸千家の流祖川上不自が明和3年(1766)東海寺で勸進の記念茶会を催し、大名を始め、幕臣では能楽師、藩士、町人など300人を越える文化人を集めたが、その時の会記に蔵前の札差や津軽藩の御用商人、池之端の道具屋などと一緒に、牡丹屋太左衛門の名前が挙がっている。\*33 名前の右左の字の違いはあるが、文献(3)でも牡丹屋敷は「牡丹屋太左衛門園中」と記されているので、牡丹屋は富裕な町人として茶の文化サークルに繋がりがあったようだ。

さらに馬琴は前述の随筆で「さばれ余が総角のころまでは、駒込のあなた、西が原てふ処に、茶器を鬻ぐ、牡丹屋とかいふものゝ別荘に、多く牡丹を植えしかば、俗に牡丹屋敷と呼べたり、そが家号を牡丹屋といひつるも、牡丹を愛るによりてなるべし、これもはや夢と覚けん、今は彼処に、さるものありしとも聞えず」と述べている。\*34 「余が総角のころ」というのは生没年から類推すると安永~天明頃で、その当時の牡丹屋敷は、今(=文政1年)は跡形も無いというのである。馬琴の証言も検討の余地があると思われる。

『北区史』の調査によれば牡丹屋敷の土地は天明6年(1786)に抱屋敷として確認されている。\*35 抱屋敷は明暦の大火後、幕府が防火のために武家屋敷や寺社を郊外に移転させた際、武家の拝領屋敷の不足から避難地確保の目的で、武家が近郊農村の百姓地を購入し所持することを容認したところから発生した。天明になると武家本人による新規抱屋敷の所持が公認され、用途も避難地だけでなく、隠居所や別荘といった性格のものが現れた。本来武家のための抱屋敷が町人に許されたのは大義名分(=御用)があったからだろう。太右衛門は手広く商いをしていたようで、本郷5丁目や神田や上野にも店を持っている。相続人がいなかったためか、抱屋敷の所持者は文化2年(1805)太右衛門甥の神田雉子町清七店理右衛門に替わる。代々神田雉子町の名主をしていた斉藤家は名義変更の事を知っていたと思われ、月琴は



その情報を踏まえて『武江年表』に「文化の始めに絶えた」と記述したと考えられる。

さて同じ牡丹屋敷と認識されがちな西箇原村の牡丹屋敷がある。文化の終わり頃、十方庵敬順は江戸の名所旧跡の探訪記である『遊歴雑記』式編\*36で次のように記している。

「武州豊島郡西箇原村の牡丹屋敷、上駒込通り妙義坂より北三町にあり、則ち路傍の西側にして植木屋仁兵衛と号す、此仁兵衛やしきハ短圍を過て少しの町並より北の方、爪先あかりに段々登りて坂上に門あり、住居ハ山より下へくだり而も広く、庭中の模形自然山の風景は、恰日くらし浄光寺等の如し、且当所の牡丹は立夏三日目頃よりをよしとす、種類いろいろあれど紅の方ハ早く、白き方ハ遅し、むかしより数百種の牡丹を作りぬれば、世の人植木屋仁兵衛とハ言ずして、牡丹やしきとのミ呼り、……されバ仁兵衛が庭中ハ春は花に富、秋ハもミちの詠ふかく、殊に山上にして西南を登臨すれば耕地を望ミ、又東北をかえり見れば道灌台の風色になぐさむ」

この牡丹屋仁兵衛の庭の場所は本郷通りを妙義坂より北へ 300m上がった道の西側ということであるから、現在の古河庭園内と推定されている。\*37 ここが太右衛門の牡丹屋敷と別のものであるという根拠は土地の履歴による。『北区史』は「抱屋敷寄帳」「諸向地面取調書」「御府内場末往還其外沿革図書」などから区内の抱屋敷の変遷をまとめており、西ヶ原村では6カ所の抱屋敷を挙げている。\*38 その変遷は表1の通りである。

表1：北区域の抱屋敷変遷  
『北区史 通史近世』P165～166

北区域の抱屋敷変遷表

村名	抱屋敷(坪数、所持者の変遷)
西ヶ原村	A 488坪+添地210坪 百姓仁左衛門(岡村九左衛門へ貸与) ①天明4年(1784)角南主水正(小姓 800石) ②寛政元年(1789)加藤左金吾(小姓 3000石) ③文化10年(1813)上駒込村百姓平十郎→④(2分割) *A1 150坪 ④文化11年(1814)元地主仁兵衛 帳消 *A2 338坪+畑205坪 ⑤文政13年(1830)西ヶ原村忠五郎 ⑥天保7年(1836)小石川一行院
	B 210坪(林畑7畝歩 Aに囲い込み) 百姓仁左衛門 ①天明8年(1788)角南主水正(A①と同じ) ②寛政元年(1789)加藤左金吾 ③文化10年(1813)上駒込村百姓平十郎 ④文化11年(1814)元地主仁兵衛 帳消
	C 252坪・畑534坪 ①[天明6年(1786)]土岐園書(700石) ②享和元年(1801)曾我又左衛門(書院番 2000石) ③嘉永6年(1853)戸口大守(西丸留守居 7000石) ④文久4年(1864)菅谷繁三郎(4500石)
	D 126坪・畑14坪+享和2年～畑512坪 ①[天明6年(1786)]福島牡丹屋敷町太右衛門 享和2年(1802)本郷五丁目太右衛門、畑512坪追加届け ②文化2年(1805)岡人勢神田権子町濱七店理右衛門 ③文化12年(1815)上野二丁目長八店忠蔵 ④文政4年(1821)百姓八兵衛 帳消
	E 214坪 ①天保5年(1834)花柳二蔵(小曾請 1000石)
	F 350坪 ①天保9年(1838)船橋勘左衛門 ②弘化2年(1845)高木内蔵頭 ③嘉永5年(1852)戸川掃磨守(西丸留守居 500石)

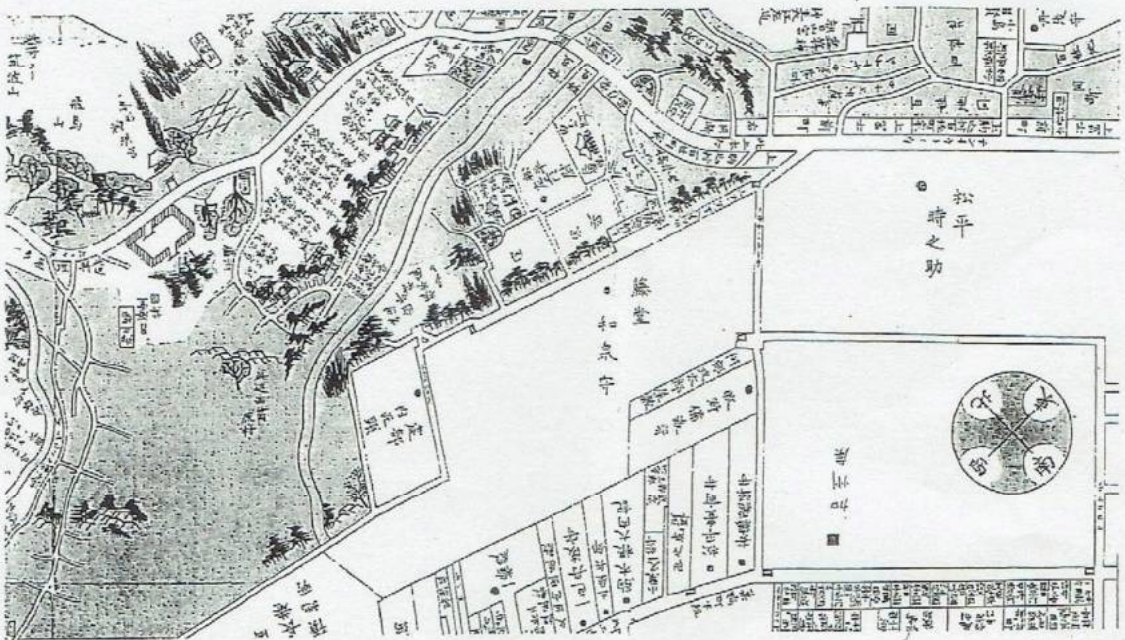
「抱屋敷寄帳」(国立国会図書館所蔵)、「諸向地面取調書」、「御府内場末往還其外沿革図書」(『近世』110～74頁)、「新編武蔵風土記」(同、174～230頁)より作成。

屋敷のアルファベットは図2-12に対応。ゴシック体のは安政3年(1856)段階で残っていたものを示す(『諸向地面取調書』)。

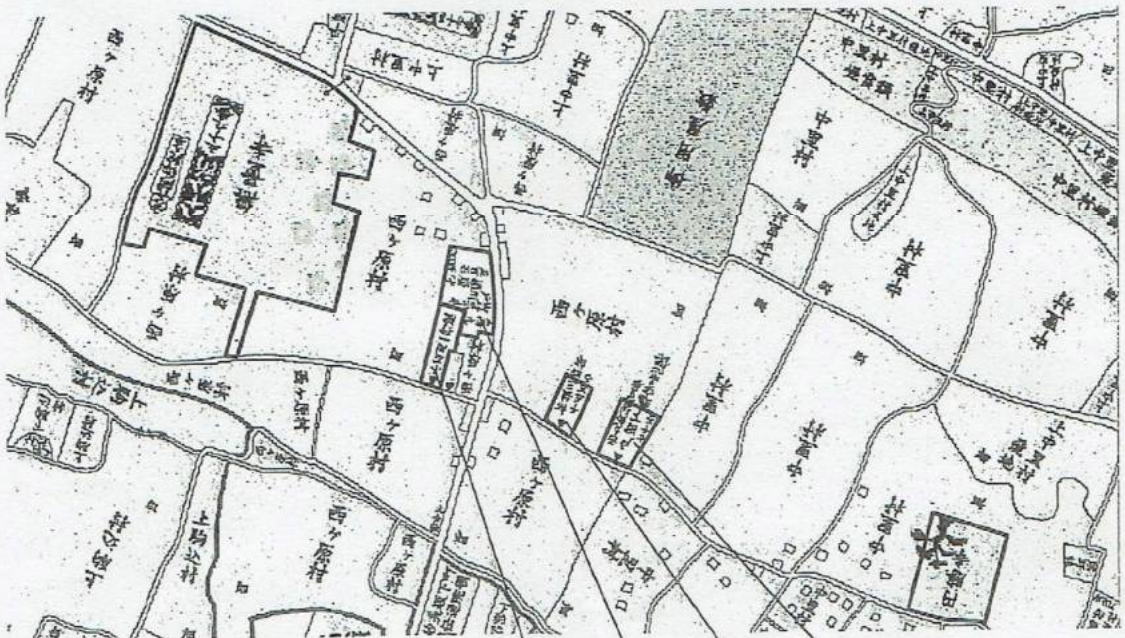
年号の[ ]表記は、最初に「抱屋敷寄帳」で確認できた時点を示す。



表の最後の段階はほぼ嘉永の切絵図に反映されている。嘉永7年(1852)の尾張屋版「染井王子巢鴨邊絵図」\*地図1 は土地の所有者を色分けして示しており、小石川一行院別荘A⑥を寺社地の赤、曾我又左衛門C②、柘植三蔵E①、戸川播磨守F③を武家地の白、百姓町屋を灰色、畑や山林を緑で表示している。方位と距離が歪み、中里のあたりで切れている切絵図だけではわかりにくいので「江戸東京重ね地図」\*地図2\*39 を参考に添える。



地図1：「染井王子巢鴨邊絵図」尾張屋版



地図2：「江戸東京重ね地図」より A② F③ E① C③



表のDが湯嶋牡丹屋敷町人太右衛門の別荘で天明6年に公式に抱屋敷として確認されている。明和～安永には百姓名義のまま牡丹栽培が行われていたのであろう。規模はD①140坪+畑14坪で、さほど広くはない。享和2年(1802)畑512坪を加え、D②文化2年(1805)土地の所持者は甥に移り、さらにD③文化12年(1815)上野二丁目長八店忠八へと移り、D④文政4年(1821)に百姓地に戻る。屋敷はD②の時点で建坪95坪。<sup>\*40</sup> 文献では中里圓勝寺から無量寺の間、中里から王子への往還に在ったとされるが、地図上の位置の特定は難しい。圓勝寺から無量寺表門への最短の道は古河庭園の南端に接する道筋なので、切絵図で道の両側にある百姓町屋のあたりか、あるいは天保になって抱屋敷となるEのあたりと考えられる。中里から王子へ向かう主要な道は古河庭園の東側を通り、無量寺裏に出る。この場合は本郷通り沿いにあったことになる。

A1④の元地主仁兵衛は『遊歴雑記』に登場する植木屋仁兵衛と推定されている。A④150坪+B④林畑210坪が仁兵衛の庭と思われ、文化11年(1814)にあわせて百姓地に戻った。仁兵衛の庭は小石川一行院の抱屋敷A2⑥に隣接する土地で、元はひとつの抱屋敷A③であった。『遊歴雑記』の内容から坂の上(北側)部分に門があるので、地図上ではF③の戸川播磨守の抱屋敷のあたりとなる。いったん百姓地になった360坪が天保にF①船橋勘左衛門抱屋敷となり、嘉永5年(1852)戸川播磨守の抱屋敷となったのではないか。

結論をいうと土地の履歴から文化11年(1814)には太右衛門の別荘D②と仁兵衛の庭A④B④は明らかに別々に存在したことがわかる。西ヶ原の地質や気候は牡丹の生育には適していたに違いない。太右衛門の牡丹屋敷が絶えた後、近くの土地で植木屋仁兵衛が多くの牡丹を作ったので、昔の牡丹屋敷にちなんで世人が呼びならわしたということであろう。仁兵衛の庭については『遊歴雑記』以外に言及する文献は見当たらない。前述の馬琴の随筆はこの3年後に書かれた。茶器を売る西ヶ原の牡丹屋の別荘に多くの牡丹を植えたので俗に牡丹屋敷と呼びなしたという表現は、『遊歴雑記』の仁兵衛が数百種の牡丹を作ったので世の人は牡丹屋敷とのみ呼びという表現とよく似ている。馬琴が指しているのは仁兵衛の庭の可能性もある。

文政10年(1827)の『江戸名所花暦』<sup>\*41</sup>は当時の牡丹の名所として木下川薬師別当庭中、富岡八幡宮、深山玄琳庭中、北沢村、花屋敷をあげているが、牡丹屋敷にはふれてない。天保9年(1838)の『東都歳時記』はそれらに加えて谷中天王寺、染井植木屋をあげ、「西ヶ原牡丹屋敷は今なし」と断っている。月岑にはこだわりの理由があったのだろう。

さて西ヶ原の牡丹屋敷の具体的な有様はどのようなようであったか、先に挙げた文献ではイメージがわからない。時代は後になるが牡丹の花壇の様子については十方庵敬順が前述の深山玄琳庭と北沢村を実際に訪れて観花の記録を残している。『遊歴雑記』五編<sup>\*42</sup>は文政末頃の上北沢村の庄屋鈴木左内の庭は大変壯観で、東西13間、南北6間の中に幅1間、長さ10間の花壇を7つ設け、385種の異なる牡丹を植えていたと記し、花壇の上には雨障子を掛けて、四方は葎簀で囲い、土留のわくから花名の札、葎簀手摺に至るまで奇麗と具体的な様子を伝えている。敬順が19、20の頃(天明期)は西ヶ原の牡丹を取りはやしたが、左内の庭の1/3にも及ばず、と記しており、昔の西ヶ原牡丹屋敷の規模が想像できる。比較の対象が近年に探訪記を記した仁兵衛の庭ではなく、太右衛門の別荘を指すのはそこがオリジナルの牡丹屋敷であり、人々の記憶にある特別な場所であったからであろう。



図1：  
鳥居清長「江都花十景 牡丹屋敷」小判錦絵揃物  
『秘蔵浮世絵大観2 大英博物館』より 講談社



図2：勝川春潮「牡丹の花見」大判錦絵三枚続  
『秘蔵浮世絵大観6 ギメ東洋美術館』より 講談社



最後に牡丹屋敷を描いた浮世絵を2点紹介したい。天明期に最も活躍した鳥居清長(1752-1815)は天明前期に明るくのびやかな独自の美人画の様式を確立した。それまでの浮世絵の概念的な背景から、遠近法を踏まえた現実感のある景色を描き、現実の江戸風景を写実的に描写したのは彼が最初といわれている。2枚、3枚の続絵を創始してひろびろとした郊外の景色を背景に行楽を楽しむ女性群像を数多く描いている。1000枚を越す現存する清長の浮世絵版画のうち、牡丹を描いたものは6点残されている。<sup>\*43</sup> そのうちの初期の作品で大英博物館所蔵の「江都花十景 牡丹屋敷」は十景の小判錦絵の揃物の1図で、天明3年(1783)の作品である。<sup>\*図1</sup> シリーズの他の九景はすべて実在の花の名所の地名なので、牡丹屋敷も実際の場所を表し、牡丹屋太右衛門の庭を描いたと思われる。<sup>\*44</sup> 庭には切石でキチンと区切られた花壇が設けられ、牡丹はゆったり間隔をとって植えられている。細い竹で簡単な囲いが組まれ、牡丹の根元は見えている。花壇の上には日除けの障子が掛かっており、障子の先に風鈴が吊されている。縁先の庭には四角い飛び石が見える。花壇に面した座敷には武家の娘と思われる女性が座って、供の女と花を眺めており、女性の膝元には蒔絵の煙草盆が置かれている。

作画時期が天明～寛政と清長の全盛期とほぼ重なる勝川春潮(生没年不詳)は、勝川春章の弟子であるが、役者絵ではなく専ら美人画を描いた。ギメ東洋美術館所蔵の「牡丹の花見」は大判錦絵3枚続で、天明から寛政の頃の作品とされる。<sup>\*図2</sup> 牡丹の花壇のある庭先で市井の女性たちが牡丹を賞でながら、おしゃべりをしたり掃除をしたり牡丹を花瓶に活けたりしてくつろいでいる情景を描いている。花壇には日除け障子がかかり、背後は葎簀らしいもので囲われている。花壇は切石で区画され、埋柱は角材であるが、竹の手摺をめぐらし、牡丹の根元は見えている。庭の飛び石や花壇の造りは先ほどの清長の図と共通している。清長や春潮の他の作品では牡丹の花壇は幔幕を張り巡らしたり、根元を垣根状のもので隠したりしており、特別に飾らず花壇の地面を見せているのはこの2点だけである。一般に春潮は女性の顔やポーズ、画面の構成やテーマなど清長を参考にしたといわれているが、この場合は参考にしたというより同じ場所を描いたと考えられる。春潮の作品は清長よりも花壇や座敷の情報量が多く、実写と思われる。掛け軸のかかる床の間、筆や硯を置いた文机などに文化的な雰囲気を感じられ、座敷の造りも別荘らしいたたずまいである。大名も出入りしたという西ヶ原の牡丹屋敷に違いない。描かれた9人の女たちのうち、掃除をする女と縁側に腰をかけている女の着物には同じ三つ葉の紋が付いており、この別荘の使用人であろうか。他の客と思われる女たちは豊かな町人階級と思われる。当図が実写と考えられる理由はもうひとつある。春潮は多くの田園風景の行楽図を描いているが、松方コレクションの「農業満作出來秋の図」と題する作品は中央図に阿弥陀道と記した道標があり、秋の彼岸の六阿弥陀詣の図と考えられる。六阿弥陀詣は信仰にかこつけた郊外への気晴らしである。無量寺はその六阿弥陀の3番目の寺で、牡丹屋敷のすぐ近くにあるのである。春潮は実際に牡丹屋敷を訪れたと思われる。吉田暎二氏は『浮世絵事典』<sup>\*45</sup> で「牡丹の花見」を西ヶ原の牡丹屋敷であると断定したが根拠は示されなかった。以上述べたことは傍証になるだろう。

最後に木村八重子先生にはいろいろご教示いただきましたことを感謝申し上げます。

(2006/4/18)



「西ヶ原牡丹屋敷をめぐって」 注

- 1 『増訂武江年表2』齊藤月岑／平凡社東洋文庫／昭和43
- 2 齊藤幸成の祖父幸雄は寛政10年に出版許可を得て『江戸名所図会』の準備を始めており、文化の頃は父幸孝が絵師とともに江戸近郊の实地調査をしている。幸成の代になって天保5年と7年にかけて『江戸名所図会』が刊行され、天保9年に『東都歳時記』が刊行された。
- 3 『北区史』北区史編纂調査会／平成4
- 4 『江戸の園芸・平成のガーデニング』小笠原亮／平凡社／平成11  では『牡丹名寄』貞享5年、『刊誤牡丹鑑』元禄2年、『紫陽三月記』元禄4年、『牡丹道知辺』元禄12年、『睡猫記』元禄13年などが挙げられている。
- 5 元禄8年成立『花壇地錦抄』伊藤伊兵衛／平凡社東洋文庫／昭和51
- 6 『園芸植物大事典4』小学館／平成1
- 7 文政1年序『玄同放言』／『日本隨筆大成』第1期5巻／吉川弘文館／平成5
- 8 写本『三浪一覽』／国立国会図書館所蔵
- 9 『池田冠山伝』小谷恵造／三樹書房／平成2
- 10 『東京市史稿 遊園篇2』所収 P631
- 11 『東京都の地名』(日本歴史地名体系13)平凡社／平成14 P453
- 12 文政12年成立『御府内備考』／『日本地誌体系3』雄山閣／平成12
- 13 『地図で見る新宿区の移り変わり 牛込編』新宿区教育委員会／人文社／昭和57
- 14 文政8-11年成立『町方書上：牛込町方書上』新宿近世文書研究会編／平成8
- 15 『東京市史稿 産業篇17』P228
- 16 『江戸学事典』弘文堂／昭和59
- 17 『朝鮮人參秘史』川島祐次／八坂書房／平成5
- 18 『花とくすり 和漢薬の話』難波垣雄／八坂書房／昭和56
- 19 『江戸の園芸』青木宏一郎／ちくま新書／平成10
- 20 『北区 通史近世』P188
- 21 『東京市史稿 遊園篇2』P389
- 22 『北区史 資料編近世1』所収 P40
- 23 『東都歳時記』齊藤月岑／東洋文庫／昭和45／牡丹の注より引用 P39／原本は摺物
- 24 『宴遊日記』-『日本庶民文化史料集成』13巻／三一書房／昭和50
- 25 『松鶴日記』-『北区史 資料編近世1』所収
- 26 『北区史 通史編近世』P189
- 27 『北区史 資料編近世1』所収 P298
- 28 『北区史 通史編近世』P167
- 29 『国花万葉記』4巻／菊本賀保／すみや書房／昭和44~46
- 30 貞享4年刊『江戸鹿子』藤田理兵衛／『北区史 資料編近世1』所収
- 31 文化13年序『遊歴雜記』三編／『江戸叢書』5巻／日本図書センター／昭和55
- 32 『増補武江年表2』より「尾久村深山玄琳といへる人の園中に牡丹數種を栽へ、開花の頃見物多かりしが、文化中より絶えたり」
- 33 『文京区史2』文京区役所／昭和42 P651
- 34 『玄同放言』-『日本隨筆大成』第1期5巻／吉川弘文館／平成5
- 35 『北区史 通史編近世』P166「北区域の抱屋敷変遷表」より
- 36 文化12年序『遊歴雜記』式編-『江戸叢書』4巻／日本図書センター／昭和55
- 37 『北区史 通史編近世』P189
- 38 『北区史 通史編近世』P165~166、P168
- 39 『江戸東京重ね地図』中川恵司編集／エービーピーカンパニー／平成13
- 40 『北区史 通史編近世』P167「北区域の抱屋敷の内部構造」より
- 41 『江戸名所花暦』岡山鳥／八坂書房／平成6
- 42 文政12年序『遊歴雜記』五編-『江戸叢書』7巻／日本図書センター／昭和55
- 43 『鳥居清長の生涯と芸術』平野千枝子／味燈書房／昭和19 全版画作品目録による
- 44 他の九景は亀井戸、柴井、日暮里、梅屋敷、桃園、御殿山、飛鳥山、東叡山、秋寺
- 45 『浮世絵事典』吉田暎二／画文堂／平成6／下巻 P243「牡丹花壇」